序章　真理を求める者のみ来たれ　This is not love song

「何人もそれを知ることはかなわぬ。
鳥獣虫類草木苔地衣類菌雲雨月星酵素鉱石石英電子重力速度時空すらも、それを知っているがゆえに」

「意識、認識、思考、情念などなどいずれも、インパルスに刺激されたニューロンの樹状突起から飛ばされた神経伝達物質が（相手側の）細胞膜の受容体に達し、膜のイオンチャネルが開かれ、イオンの流入を受け、内と外とのイオンの濃度差が逆転し、内外で－＋だった電荷の関係が一時的に＋－に転じるという、電気的な発火現象（インパルス）を起こし、樹状突起を刺激し、同じ現象を繰り返すという、化学的な現象に過ぎない。
とすれば、我々の哲学や愛情は何なのか。誰がそれに答えられようか」

『……真実を究めたい。事実を究めたい。存在を究めたい。現実を究めたい。生きるを究めたい。それらはすべて同じ問い（同じ要求）である。
だが、そのような考えは、何か。諸考概の根拠も経緯も知られていない。ただ、了解という意識、納得という気分がある。それは、唐突に、忽焉とあるかのように、我らに直観に映ずる。だが、本当に、そうなのかは確かめようがない。
しかし、このような批判を行う思考は論理という律令に沿って結論へと導くが、その律令に遵う限りに於いては、未検証な律令に導かれた結論は信頼に価しないとされ、この律令はまさに未検証である。だが、論理を用いずにそれを検証する思考方法はない。
（ならば、この言葉は何を言っているか。http://book.geocities.jp/tshby6/bluezhyper.m4a である）

これが知らぬ者なきアカデミアのテーゼである。

私はこの聖なる公理を見るたび、あの巨大な大聖堂を中心とした厳粛なる都市を思い浮かべる。永久に凍りついたかのような極北の地に、永劫を象徴するかのように堅牢に聳えて、天を突き刺すかのごとき尖塔の束なる都市を。

まるで聖なるIの文字のような不思議な形の巨石の頂上にそれはあり、全体がまるで聖槍のごとくあった。都はさながら聖槍の穂先のようであった。なお、巨石は古来、山として見做され、イデア（Ιδέα）山と呼ばれる。

燦然たるかな大いなる神聖都市、永遠の学都であるアカデミア。冷厳なる城壁と、黄金の機装甲戦士らに護られ、北大陸（Norte ノルテ）の北西、峻嶮なる山岳地帯にある、選ばれし者らの都。叡智と真義の究竟の地。

だが、そういう世俗一般の理解とは遠く離れ、聖なる学都の中に於いてさえも、自己の権利の生存を廻る争いは絶えることがなかった。

人は幸福を希い求めながらも、不幸の種を蒔くよう宿命づけられた生物なのである。大いなる摂理を理解しながらも、結局、やっていることは、こどもの喧嘩と大差はない。誰も自然が与えた性質から逃れることは出来ないのである。

さて、大聖堂を中心とするこの都市にある、幾つもの派閥の争い、それがこれから語らんとする物語（ロマンス。「ローマ的」とは、中世に於いてアカデミックなラテン語文献に対する民衆的なものというニュアンスがあり、そこから小説、物語などの意味が生じた）である。

バルディアーノ侯爵にして白と碧の十文字正教の教授ならば、きっと苦笑して言うに違いない。

「芸術は退廃である。

文学を見よ。恋愛や人間の心情の機微を描いたものを読んで、カタルシスを得たからといって、魂に何の寄与をしようか。幸福への道だろうか。真理への到達だろうか。

だが、愚かな者どもは束の間の逸楽に惑溺して、生命に達しようとはしない。歓楽は歓楽に非ず。

生命は生存ではない。

耳ある者は聞くがよい」

第一部　本質論

第一章　緒説

今でこそ一般に開放されているが、かつてアカデミアは、いや、『現実世界（Real World）』そのものが選ばれた者しか入れない、選民的な、閉ざされた世界であった。このことは、史上歴然たる事実で、多くの人が知るところだ。

だが、それがなぜ開放されるに至ったか、その経緯を承知する者は少ない。これは由々しき問題である。

なぜならば、その後の展開を鑑みても晰らかなとおり、大本の大義の本質が失われ、形骸化することが、大いなる損失に繋がるからである。

開放という偉大な公決議、第一次革命の後、数年と経ずして第二次革命が起こった。正義を為す者、高邁な叡智を取得した者がＱＰ（クドク・ポイント）を与えられ、高い点数であればあるほど、人々の崇敬と超越的な権力が与えられるという世界が構築され、正義が暴力よりも必ず優位であり、叡智が金よりも重宝されるという、人類の本来の理想に適う大地ＩＥ（Ideal Earth）がリアル・ワールド内に特化された形で独立した宇宙として、世界化されたのである（アカデミアもその頃にＩＥへ移設された）。

これは一般開放によって多様化し、現実のように、ただただ力だけの世界に堕したため、原点に回帰しようとして行われた修正的な改革だった。

しかし、結局は、正義と叡智が現実的な力を持つという一見、理想のような世界は、ふつうの現実への厭世を強く呼び覚まし、真の幸福への道ではないことが次第にわかってきたため、数年としないうちに第三次革命が起こって、ＩＥはＱＤの解釈を大いに変更したのである。

かような歴史を鑑み、私はこの後も続くであろうリアル・ワールドのためにも、人類の叡智を無駄にしないためにも、浅学を顧みず、膨大な資料を渉猟しつつ、開放へと至った経緯と精神とを錄すため、筆を執ることを決めたのであった。無駄ではない。そう自負する。

ただし、筆を執る前に、一つ特に自戒すべきことがあった。

往々に歴史を基に論ずる者は、自己の主張を強調したい動機に駈られて歴史を引用し、都合のよい歴史のみを取り上げるものである。

自らに於いて、私は厳にこれを戒めよう。

自己分析能力のない者ども、自己の動機を深く読み分けることの出来ない愚か者どもは、自己の論にとって不都合な歴史には眼を伏せるか、更に悪い場合は、その歴史を知りさえもしないのである。

身を顧みずに敢えて言わせてもらえば、国や民族や主義や宗教などのあらゆる立場を超越した立場から、歴史全体を均等に照覧した上でなければ、歴史を用いた批判をしてはならない。正確な批判を成し得ないからだ。事実に反するからだ。凡ては事実に基づくことが正義である。事実に沿った精緻正確な主張でなければ、悪である。罪を生む。それは実に歴史に限らず、一切についても言えることでもある。

自らも大いに戒めるところではあるが、さように考えるに理由として、次にような思想がその基礎にある。

すなわち、こうだ、『凡ての事象に於いて原因が一つであるということはなく、絶対常に複数の要因が複雑系的に絡み合い、一様でなく、捉え難く、それゆえにすべての事象の理由は事象ごとに異なり、すべては常に個別的で、複雑系的なのである。それを無視する者は、安直で便利な、宗教批判や民族批判、イデオロギー批判や国家批判等を叫び、世界への悪辣を為す』

むろん、批判は必要だ。絶対に必要だ。批判されない者は絶対に腐敗する。人権を弾圧する諸国を見れば明らかである。私が言うのは、単純短絡過ぎる昂ぶり（昂奮と愚かは同義語だ）、『悪の宗教』だの、『悪の民族』だの、『悪の国家』などと喚く人のことである。

いやいや、ここで既に自戒しなければならない。彼らとて、複雑系的に解析すれば、実は皆一人ひとり異なり、全く同じ動機ということはあり得ない。十把一絡げ的に批判するのは悪である。

私は自分自身をさように批判しよう。人は常に自己を批判し続けていなくては、新清でいることが出来ない。

話は大いに逸れたが、実は無関係ではない。

最初に結論を言ってしまえば、『現実世界（Real World）』を一般に開放しようと決めるにあたっては、そういう思想から成ったものなのである。

現実はどこまでも未遂であり、どのような見解に収まらず、答えがなく、複雑系的で個々別的で、現実に於いて幸福を得るには、現実を変革する努力を絶やさずも、現実を龍の大いなる肯定で諾う（そのためには無駄な執著を削除しなければならなくなる）しかないのであ

る。

選別をやめ、事実を事実のままに、凡ての人、愚かさも賢さもそのままに、しかし、放置ではなく。凡ての考え、念いも批判も綯い交ぜになって、まさに現実的に、事実に沿った世界への回帰、事象へ還れ、を合言葉に転向したのである。

そして、それがアカデミアのテーゼにも合致する。アカデミアこそはリアル・ワールドの真髄をなす本質精神である。テーゼとの一致は本来、不可欠なはずなのだ。

第二次革命の直後であっても、登録してパスワードを得れば誰もがログイン出来る、という参入システムが一般に開放されているという点に於いては、変更がなかったのも、そういうことであった（ただし、二次革命の遺産として、参入者は必ずアカデミアで二十七日間、基礎講座及び選択制の専門講座を受けるという制度が残った）。

第二章　序説『意識構築の経緯は実存的には唐突でしかない』

諸源に還って、革命以前に話を戻す。

当時は違っていた。一定以上の精神世界上の位階に達した者、霊的な意識、神的哲学の領域に近づいた者しか入れなかった。

だから、参加したい者らは、その者に合った様々なやり方で修練し、自ら見つけた自分だけの方法により、その領域に達し、それが認められて参入するのだ。マニュアルも規定もない。

その成果を、人ごとに異なる幾つかの問答と、眼光や全身から湧く何かとを合わせて判定するシステムが総合的に判定し、参入が許可されるのだ。

その判定の仕方を説明することは難しい。特に、眼光やその人物が発する気を量るなど、言語を超越しているからだ。

だからと言って、問答の方は説明し易い、というわけではない。だが、全く言いようもないというわけでもない。

人ごとに異なるので詳述は出来ないが、判定の大まかな条件を、不正確を承知で、敢えて一言にすれば、『無条件に是認さえている固定概念の超越』と言えるだろうか。

例えば、論理という枠組みへの懐疑。

ただし、この懐疑は思考を停止せざるを得なくなるばかりか、停止しなくては不合理とい

う判断を下すことも、論理によって導かれていることに気がつかせるので、二律背反（アンチノミー）に陥る。

これに気がついただけでも、一定の資格が附与され、予備登録される。

その他にも、時間について、など。

すなわち、時間は過去から未来に流れ、遡ることはないという固定概念を超越し、時間は意識の系列化による分別であると覚り、時間の客観性を超越した者なども資格所有候補である。

この認識は客観的実在の超越をも意味する。とは言え、客観的な実在があるかとか、ないかとかいうようなお目出度いレベルの話ではない。

そもそも『客観』という設定（価値）については根拠も理由も経緯もはっきりしないし、よく考えると、ただただ、唐突に、理解（納得という心情）があるだけで、精細緻密に問い詰めると、何のことだかよくわからない。造られたもの（捏造）だという直観も、拭い切れない。我々は、ただ、莫迦みたいに受け入れているだけでしかない。

それは『実在』についても同じだし、凡ての概念について同じである。そう、『設定』『価値』『根拠』『理由』『経緯』『唐突』『理解』『納得』『心情』『ある』『問い』『何』『こと』『わからない』『捏造』『直観』『同じ』『すべて』『概念』『真実』などなどについても。

そもそも「わかる」とは何なのか。どういうことなのか。何が起こっていることなのか。それは「何か」とは、何か、どういうことか、という論理的には自家撞着でしかないことと、ほぼ同義である。

このように思考の進み方を規定する一定の規程、言い換えれば、論理の航路を規定する律令、論考法、規程、規則（又は論考約款、或いは論考寄附行為（財団法人設立の基幹を成す規程））についても、〝同じ〟だとしたら？

とすれば、私は今、何を言ったことになるのか。そんなことを誰が知り得ようか。いや、全存在者が知る？

いや、現実のとおりだ。

第三章　アカデミアン・ラプソディ

参加する者たちは、すべてさような未遂不収（未だ結論を遂げず、いかような見解にも収まらない。しかし、無莫ではない。なぜならば、無莫は無莫という、一つの方向を向いている。一つの結論であり、一つの見解に非ざるを得ない。未遂不収ではない。未遂不収を強いて表現すれば、無方向、又は全方向と言えなくもない。それゆえに全存在者が既に知っていることであり、全存在者既知なるようなものゆえに、誰にも知ることが出来ない）という狂躁秘祭的なスタート地点にいた。恐るべき荒野、疾風怒濤の狂詩曲、身も裂き砕き天翔け躍るよ。

だが、何もしないことは出来ない。

腹は空くし、空気は吸わずにいられないし、血は体を廻っているし、目薬を差すだけでも瞼が勝手に動く。

しかし、意図してどこかへ向かおうとすれば、向かうべき先どころか、蹴るべき足場も、何もかもないが、出発はしなければならない。

足場を、心に求めるしかない。なぜならば、人は皆（あたかもそうではないように振る舞う者も、実は変形的な形で）望むものを求めて生きているからである。つまり、世俗的に言えば、幸福を希い求めて。

あとは、どれが真の望みかを見極めるだけでしかなかった。

心の声に随い、心機（心の奇跡の働き、解脱のようなもの）を求め、真の幸福を得る努力をするのだ。

かくして各々が直観を清まし、その観察の結果に応じ、自ら信じるところの様々な説を主張し合うようになった。それはあたかも古代の釈迦が「伝承に依らず、自ら証したところによって説こう」と言ったことに、一見似ている。

しかし、釈迦の精神とは大いに違っていて、彼らは百家争鳴の様相を呈した。

第四章　なぜ神学要綱（スンマ・テオロギアエ）は中断されたか

私は全ての資料を渉猟し、全史的視点をもって全体を通鑑した。それゆえにあの時代にいた人々の立場に身を置いて、凡てを詳叙することが出来る。

よって、以降は三人称で語ろう。ちなみに、私がこの小説の中の誰であるかは、読んでいただければ、明瞭であろうと考える。

当時、ドメネコーニとベッカム・ウィームスは激しい論争をしていた。

ドメネコーニはイデアが本質であり、本質は実在すると言った。しかし、ベッカムは本質とは人の心が作り出す名前に過ぎず、実存は本質に先行すると言った。

その考えは、現代的な常識に適合するが、この世界にいる者は誰もそれを乗り越えた一癖も二癖もある者らばかりである。容易にベッカムの圧勝とはならなかった。

牛のような巨漢のドメネコーニは鷹揚に反論する。次のようにだ。

「人知は神の知に及ばない。

私の記憶によれば、プラトンはこう言った。

『この世に純粋な円（一つの点から等しい距離にある全ての点を結んで出来る図形）は存在しないのに、なぜ人は円という定義を持つに至ったのか。不完全で不安定な、整理されていない事物の観察から、どうやって人は論理的にしか存在し得ないものの概念を得るのか。

どこかに純粋な円、円の本質であるもの、円のイデアがあるからである。

イデアの世界に円のイデアがあるからである。

この世を超えた真の世界（イデアの世界）が真の真なる意味において実在していて、現実はこの真実の影だからである』

これが古典的なイデア論だ。

私は少し違う。

神が人に与えるからだ、と言おう。

神の智慧が人へ流出するのだ。水が上から下へ流れるように。そうでなければ、幸福には到達出来ない。君はこの世を説明出来るか。凡ては奇跡なのだ。人の心は真に於いてそうあることを求めている。十一次元の宇宙世界をも超える神の全能を、超越性を、すなわち人知が及ばないことを思えば、心は静謐を得る。

人の求める幸福の究極が神なのだ。そう言うと、不遜に聞こえるかもしれない。ならば、逆に言おう。

むしろ、正しい順序で、と言うべきか。

神が完全であり、凡てであり、善の窮みであり、一切であり、無尽で、無際限で、究むべき極みであるから、それは当然、人の幸福の究竟なのだ。

実在などという、人の浅知恵ではない。実在を遙かに超えている。真の実在だ」

ベッカムは、しかし、痩せて蒼白い顔を猜疑に歪めて言う、

「それは論を撥ねつける壁だ。
確かに我々は論理思考を懐疑する。だが、それなくしては何も出来ない。非真理派の連中みたいに黙ってばかりいるわけにもいくまい。
だから、未遂不収を踏まえながらも、論ずるのだ。神に帰する論は論にならない」
「君の言うとおりだ。
しかし、目的は幸福である。それが神の命題であり、神の意に適う、神に随うことでもある」
かくして論争は終わらなかった。
しかし、突然にドメネコーニは自説を放棄してしまうのである。完成間近の『神学要綱』の執筆までも止めてしまったのだ。祭壇の前で礼拝の儀の途中に、忽然と何かに覚醒し、遙かを見据えて打ち震え、しばしの中断の後、どうにか儀式を終わらせ、そそくさと研究室に籠もると、突然に執筆の中断を宣言したというのである。
アカデミアは騒然とした。誰もが様々な推測憶測をした。推理を楽しむ者もいた。
ところが、非真理派（現実主義無空派。彼らは現実主義のうちの一派のため、こう呼ばれる。原理主義的な純粋さで未遂不収を貫く）のシューニャータが激しく主張し、事態は容易ならぬところへ飛び火した。白髪を束ねる長鬚の長人（背の高い人、のっぽの意。孔子がこう呼ばれた）はこう宣う、
「つまり、ドメネコーニは超越論的実在論・イデア論の果てに、超越を超越し、遂に真理は存在しないことが幸福への道、アタラクシアであることを愕然と覚ったのである。
だから、すべての論争を放棄したばかりか、何の釈明も主張もしない。
これは我が無空派の、捨置除却（捨て置き、取り除く。清浄な生活と平安、幸福とに寄与しない質問や、アンチノミーにしかならない議論を相手としない態度）であり、無記（記別せざる。どちらとも言わない）である。彼は究明の窮極に於いて我らと同じ結論を究竟したのだ。
これは我らの正しさを実証するものである。
あゝ、これに比して、ポスト真理派の何と愚かしいことよ。
彼らは真理を欣求しないという少々変態的なスタイルで真理を欣求しているに過ぎない。
我らが純粋性とは大違いだ」
ポスト真理派と一口に言っても、真理という価値観以外の価値を見出すという趣旨なので、全く異なる様々な派閥がある。

お門違いな非難に閉口したものの、非真理派は何を言われても捨置除却という態度で、「盡く通説せず」とし、無記を徹すので、抗論する方が虚しかった。

そんな雪降る日。

龍咒（リュージュ）は天易真兮（あまやすまことや）のところへ赴いた。彼はポスト真理派のうちの一派である超人主義に属したが、日頃から賢者と呼ばれる真兮に傾倒していて、流派を超えて行き来している。

そこで、ふと、シューニュータの主張について、真兮の意見を聞いてみたくなった。

なぜならば、彼は非真理派と同じく、現実主義の一派である釈迦牟尼主義の一人だったからである。非真理派も釈迦牟尼主義も、ともに現実主義という大きな派閥の一派だったからである。

第五章　天易真兮の龍肯論

龍咒は築五百年の由緒ある高級アパートで起床し、執事シガリロの淹れたカフェオレを飲み、湯浴みと専任の理髪師の調髪を済ますと、礼拝室で唱誦して塗香し、いつものように羽飾りのついた大きな帽子と騎士の正装で、颯爽と騎馬で出掛けた。随行者は三名で、三人とも環境的人物である。環境的人物とは、ＩＥのシステムの一部で、人型で、人と同じく意思を持って行動するが、人ではない。山や川や風や雨や太陽と同じく、システムである。大概の動植物と同じく、システムである（熊や狼や鷹や老大樹になりたがるユーザーもいるので、全ての動植物が、というわけではない）。

三人のうち、口髭のバンジョーニはルネ・デカルトのような大柄な剣士で、龍咒のように盛装した騎馬に騎士然として乗り、あとの二人は徒歩で槍を持ち、ついて来ていた。

旧市街の、古い城壁の一部のようにある。

又この辺は旧城壁の外側に、新市街が広がるでもなく、実質的な都市の外れで、城壁そのものでもある屋敷のふちは、イデア山の頂上のふちでもあり、眼も眩むような断崖絶壁であった。

奇妙な邸宅である。

城壁から角のある巨大生物の頭が抜き出て来たかのような、勾配の急なスレート屋根はまるで彼の被るウィザードハットのようであった。もっとも、彼の帽子は半ばで折れ斃れてい

るが。

小部屋を継ぎ足して出来たような複雑な形状で、それが余計に生き物の頭又は顔のように見せていた。壁は自然石を粗雑に積んだ原初的味わいのあるもので、屋敷の三方を囲む低い塀と同じ素材だ。

庭に樫の大木があり、唐突に枯山水の石庭があった。

龍児は随行者を随行者控室に残し、勝手知ったる様子でさっさと石段を上がり、エントランスに入る。随行者は控室に附随するバーで一杯やるのが常であった。無駄話をするのだが、相手が人でないとわかっていても、バンジョーニは敢えて興じる。

彼は現実主義のうちの棄身派で、執事シガリロと同じく、身を窶し、自尊心を棄てる修行をする一派に属していた。

「やあ、よく来たね」

執事アレクサンドロス（環境的人物）が開けた扉から入ると、書斎の真兮が迎え入れてくれた。

書斎は古い齋樫のように森厳で、羊皮紙の古書やパピルスの巻物、椰子の葉を綴ったもの、和綴じ、粘土板や石板など、古今東西の古典籍が吹き抜けの天井まである書棚にずらりと収まっている。書棚には階段とバルコニー型の回廊がつき、大きく言えば、三階層になっていた。

柔らかいタン色の革張りの安楽椅子に坐り、キャラバッシュ・パイプを燻らしていた真兮は龍児に席を勧める。「まあ、坐りたまえ」

スコッチの壜のクリスタル栓を緩め、とくとくと琥珀色の液を注ぐ。龍児は限りなく透明なクリスタルのグラスを受け取り、

「著述かい？」

厳めしく大きな机の上の羽ペンとインク壺と石のペーパーウェイト、表面を荒らした羊皮紙などを眺めつつ、そう尋ねた。

「そう。『大いなる龍のごとき肯いの経』を推敲していたのさ」

「どんな内容なんだ？」

「未遂不収は、ただ、現実で、『人、堂々果敢すべし。人、義しきと以ふを為す善し』という行動原理を妨げない（こともしない）。

っていう、誰もが知り、誰にも知り得ない〝真理〟を態々書いているのさ」

龍児は顔を曇らせた。非真理派のシューニャータを思い出したのだ。真兮はそれを見逃さ

なかった。
「君はどう思うのかな、龍児」
「わからないね。要するに、ドメネコーニが何を考えているかがわからなければ、何も言いようがない」
真兮は臍下まである長い顎鬚口髭頬髯を持ち上げるように微笑する。
「では、出掛けよう。実は調査委員会から、小生に依頼があったのさ」
「調査委員会？」
「むろん、トマス・アクィナス派（ドメネコーニの属する派。本質論派のうちの一派）は調査委員会を立ち上げたのさ。本人の事情聴取はできなかったらしい。
様々な方面に依頼があったが、小生にもお鉢が回って来たのさ。さあ、ともかく行動しよう。
とは言え、最初に断っておくが、謎は既に解かれている。解答は初っ端から出ているだが、だからと言って何もしないということには繋がらない。行動を妨げない。真逆で、行動すべきだということさ」

第六章　奇人は亡び逝く人類よりも神のために詠う

龍児は真兮の言う意味を理解出来なかったが、早速、バンジョーニに、帰宅して旅の支度をするよう言いつけ、自らは真兮邸で待った。
絶壁に面した窓からははるか遠くの山脈の銀嶺の連なりが見える。真兮はパイプをふかし、物思いに耽りつつ、龍児を正面から見据えて語る。
「ドメネコーニはノルテ（北大陸）南部、フロレチェ国のアクイーノにある城砦で生まれた」
「何と。故郷まで行かなくてはならないのか」
「凡ての事象の原因は複雑系的で個別的だ。物事を端的に捉える人は害悪だ。科学的事実に副わない見解は悪だ。悪の国家も悪の民族も悪の宗教も悪の人種も存在しない。
だから、彼の個人的な事情の端緒から調べなければならない」
四人の護衛と三人の雑役夫と二人の馭者と一人の料理人とを含めた十二人隊を組んで、厳めしく聳える門をくぐった。高さを支える城壁が途方もなく厚いため、それを徹る門は隧道のようである。

護衛は聖騎士で、黄金とダイヤと螺鈿で聖なる句を象嵌し、聖なる象徴を七宝と漆の蒔絵とで荘厳したオリハルコンの鎧兜で全身を装甲していた。

イデア山は垂直の絶壁なので、路は溝のように掘られた九十九折である。遠くから見ると細かい稲妻模様に見えた。吹雪く中を１・２５マイルも降るので、容易ではない。降りれば降りたで、峻しい山岳を行く狭隘な厳冬の道で、少し行くと早くも、威嚇的に尖った岩と岩の間をすり抜けるように山を登り、クレパスに気をつけながら氷河の谷を下り、眼も眩む橋を渡った。

「俺たちは暖かい馬車（アカデミアの公用車輛、寒冷山岳地帯仕様『羚羊』）の中にいるからよいが、騎士や雑役夫は大変だな」

「馭者もだ。天蓋附きの馭者席だがほとんど外と変わらない」

座席の後ろではコトコト音がする。ギュスターヴ・フローベールのような口髭を蓄えた職人気質な料理人のキュイズィーヌが大型馬車の後部にある簡易キッチンで調理しているのであった。真兮は彼をキュイズィーヌと呼ばずギュスターヴと呼んだ。

「龍馬もだね」

龍馬とは、馬と龍の間に生まれた半神獣で、この嶮しい山岳地帯を越えるには欠かせない同士である。この艶光りする妖しい生き物は蹄の代わりに龍の爪があり、垂直の絶壁であろうとも、馬車を牽いて軽々と上った。

龍咒は刺繍の入った贅沢なバラ色のシルクのカーテンを開き、曇るガラスを手の甲で拭いて、飽かずに外を眺め続け、真兮は羊皮紙の本を読み耽る。

翌々日に最初の村、コキュートスに着いた。

山岳にへばりつくような集落から少し離れ、サイの角のように突き出した岩の上に奇人が棲んでいた。天平普蕭（あまひらふしょう）という名である。

「普蕭（ふしょう）くんは元気かな」

龍咒がそう言うと、真兮は、

「寄ろう。

彼はもともと、本質論派のパルメニデス派だった。何か参考になるだろう」

屋敷はほとんど岩山との差異がなかった。窓が少なく、あっても小さいので、余計そんなふうに見える。灰色をしていて、雪をかぶっていた。高い石積みの塀に囲まれ、門の上には櫓があった。

「誰だ」

門番は巨体を持った粗野な蛮族で、血の滲みた革鎧、荒鬚が立って四方に広がるなど、威嚇的な荒武者ぶりだった。

「おい、小生を忘れたのかい、ブレイキー」

馬車の窓から首を突き出して真兮がそう言うと、

「おお、これは、真兮の旦那でしたか。失礼いたしました。さあさあ、どうぞ。屋敷に繋がる秘密の呼び鈴を鳴らして、家令長のチャールズ・パーカーに伝えましょう」

玄関の前までは馬車で進み、半地下の車寄せで降りる。

すぐに赤々と暖炉の燃える居間に案内され、深々とした白虎の毛皮の敷物の上に素足を伸ばし、ゆったりした気分になった。

普蕭は長めのマッシュルーム・カットに多国籍的な民族衣装とモロッコ革の室内履きを履くサイケデリックな服装で、整った顎と鋭利なまなざしを持ち、書籍の蒐集家であり、詩文を作った。古代ギリシアの哲人が『自然（フュシス φύσις）について』というタイトルで書いたように、哲学的思弁を詩で表すのである。

「僕はどこにも発表しない。

人は皆、自分のために評価する。自分を守るため、癒すため、賞讃するために。つまり、自分を肯定するために他人を評価し、批判し、賛同し、非難するのだ。

そんなものに依存するのは愚かだ。

そのような儚いものに。

いずれ亡びて読む人もいなくなるのに、人類に媚を売って詩を書く気はしない。神のために書く。神こそ永遠絶対の評価者だ」

常にそう主張していた。アカデミアの学会からも離れている。

セキュリティのもろい田舎なので、屋敷は非情なまでにストイックな厳格さだが、インテリアは砂漠の皇帝のような豪奢と贅沢であった。繻子と大理石と毛皮と黄金細工と砂漠地方の絨毯とゴブラン織りのタペストリー。

真兮は長々と身体を伸ばすように坐った。

先が折れて曲がったウィザードハットに、長髪は尻まで垂れ、片眼鏡、顎鬚口髭頬髯は臍の下まで、金の紐や房飾りのついた水色のパステルカラーの儀礼用ミリタリー・ロングコート、大きなカフス、サテンのシャツ、リーヴァイスのジーンズ、形が崩れ弛んだ蛇皮のロングブーツという姿で。

同じくゆったりとソファに坐る龍児は気がつく。智慧の鳥フクロウがこちらを見ている。

「きっと、彼らにも彼らのスタイルで俺たちがするような意識があって、全く異なる世界があるんだろうな」

龍児のその言葉を聞くと、尖った鼻先を突き出し、普蕭は言った。

「むろん、そうだ。鳥には鳥の観ずる全く別の世界がある可能性がある。彼らから見れば人間は知性のない生き物かもしれない。

僕は空想するがね、凡ての存在者には、彼らのスタイル（様式）の意識があり、精神があり、意思があり、思考があって、（僕らの料簡から見た場合には）異次元的な彼らの世界が存在すると思う。

たぶん、小石から見れば人間なんて、石のようなものなのさ。何も考えないで転がっている、存在の中に埋没しているような、ね。

鳥に知性がある可能性があると同じくらい、人間には知性も意識もないのかもしれない。僕らの脳裏に泛ぶ現象（もしくは、表象と言うべきか）は、もしかしたら現象ではないのかもしれない」

そんな浮世離れした愉しい会話のさなかに、粗い、荒っぽい、非情な無機質さを持つ暴力的な事実が割り込んできた。

チャールズ・パーカーが入ってきて、蒼白な面持ち。

「普蕭様、悪い知らせです。所属不明の兵士数十名が村を囲んでいます。どこの軍隊か定かではありません。晰らかに調えられ、訓練された正規軍なのに、判別できないらしいのです。なおかつ、数百の軍が各街道を封鎖しているという報告も来て上がっています」

普蕭は肩をすくめた。

「いつの世も、真実と叡智と正義は権力から妨害されるものさ。

ちなみに、封鎖している街道はどことどこだ」

「南街道、東南街道、西南街道、東街道です」

チャールズ・パーカーは淀みなく、そう答えた。龍児は不思議に思い、普蕭に訊く、

「どうしてわかるんだい」

「物見をあちらこちらに配してる。どんな理想主義者も、現実に対応しなくてはならないし、又はゲームみたいな悪魔的楽しみなのさ。

じゃ、逃げるか」

真兮は机上の葉巻ケースから葉巻を出し、少し火で炙ってウォームアップしてから火を点けた。

「当然、狙われているのは、小生らなんだろうな」

涼しげな顔で普蕭が、

「異論の余地はないだろうね。このタイミングで、フロレチェ方面の街道が全て塞がれているからね」

「雑役夫や護衛たちに出発の支度を命じよう」

そのとき、緊迫を孕みつつも、むしろ、がさつな普段よりも落ち着き払ったブレイキーが来た。

「この屋敷は囲まれています。息を潜めて、奴ら虎狼のようにこちらの動きをうかがっています」

普蕭は微笑む。

「地下洞を行こう。こんなときのために、ルートは作ってある。公用車輛と龍馬は捨て置いてくれ」

「馭者は落胆するだろうが、やむ得んだろうね」

真兮はそう言って、紫煙を吐いた。

速やかに地下室に入る。薔薇の隠し扉があり、掘削した通路があり、地下洞に繋がっていた。

真っ暗な闇。大いなる無窮の深淵。混沌と無方向。

そこへ飛び込む瞬間の恐怖。唯一の導きとなる、炬火。それを持った蛮猛なブレイキーが魁となって闇を裂く様は、黎明が夜陰を破るかのようであった。その後を彼の配下の兵士数名が用心深く警戒を怠らず、眼を睜(みひら)いて続き、普蕭、真兮、龍児がその後を歩み、ギュスターヴ、馭者二人、雑役夫三人、鎧兜の護衛四人が続く。

その後ろがチャールズ・パーカーと料理人たち、家政婦たち、召使いたちなどで、最後尾が普蕭の配下の戦士たちであった。

地下洞は氷河の穿った自然の洞窟で、遠くで激流の音がした。堕ちたら奈落の底まで流され、二度と戻れないだろう。あちこち複雑に迷路のように穴が拡がり、やがて断崖絶壁の峡谷や巨大な淵、地底湖などもあらわれ、行けば行くほど、洞穴は巨大さを増していった。

人に根源的な畏懼を与える。非理性的な、原初的な雄叫びが、底から洞内に響くようであった。

「地下の古代魔神がいても不思議はない壮大さだな」

「生きた心地がしないよ」

曙光が兆すように明かりが見え始め、ようやく出る。
「あゝ、生き返ったかのような気分だ。甦ったような」
「いや、まさに黄泉帰りさ」
そこは街道よりも高い位置で街道に沿うように岩の間を進む細い道があった。
「人の知らない狭路さ。
造るときには、誰にも知られないよう、音も立てずに、身も隠すようにして整備するように、作業員へは指示したんだ。
しかも、街道の様子を上から覗くこともできる優れものさ。気持ち良いもんだよ」
「俺たちは何で狙われるのだろう」
「ドメネコーニのことを探って欲しくない奴がいるんだ。しかもそこそこの力のある奴だ。兵を動かすことが出来るなんて」
「でも、なぜ、何者が」
「憶測は出来るが意味がない。今は問うよりも、難を逃れよう。そういうものさ。釈迦も毒矢に射られたときは射手を問うよりも、薬師の治療を受けろと言っている」
そこは南の街道だった。
「見ろ、関所だ。物々しいな。あの荒くれ連中を見ろ、正規軍ではない。何をされるかわかったもんじゃないな。無知の獰猛は醜怪なものだ」
「この狭隘な岩の狭間の路を往けば、スルー出来るのかな」
「何とも言えないな。敢えて北へ行くことも考えた方が良い」
「では、そうしよう。それが危機管理というものさ」
「この先にこの狭路の十字路がある。右に行けば、北面へ行く」
「わかった。あとは小生らで逝く。君を巻き込むつもりはない」
「莫迦を言え。くだらない気遣いより、事実を認識したまえ。もう巻き込まれた。戻ってもただでは済まないし、冒険のチャンスを逃したくないね。喪うものなどない。人は、いや、全て存在者は初めから無一文だ」
しかし、北に行くと、関所はないが、密かに伏して、独特の凄味のある、場の自然の一部のような傭兵の姿が見えた。
「地元の傭兵だ。パルチザン戦のプロを配している。罠だ。君らが通常ルートを避けるという可能性が高いことを予想して、敢えて東西南に大規模な関所を設置し、こっちに誘い込む策略らしい。

こういう場所では、奴らのような連中の方が正規軍より実践的だ」

「道のないところを行くか」

「それができるなら、そこにも兵を配置しているだろう。実際には無理だ。自然はそんなに生易しくはない。

マッターホルン北壁か、アイガーの北壁でも登るくらいの技術と装備があればもしかしたら行けるかもしれないが、僕らでは望むべくもない」

「じゃ」

真兮は言った。

「空だな」

ユムグラッド山の頂上近く、巨大な金翅鳥の家族が棲む。

「なるほど、真兮が言うのは、金翅を持った太陽のカラス（烏）、クローヴィングのことかな。

幸い、彼らの棲むユムグラッド山の、その麓までなら、この狭隘路が続く。しかし、人間を蔑んでいる彼らが味方をするとは思えない」

麓に着いて、道なき岩壁をよじ登り始めると、クローヴィング族の長、ユームが立ちふさがった。翼を広げて威嚇する。左右八十フィートを超えた。射抜くような炯々たるまなざしが鋭かった。

「汚らわしい地上に蠢く生き物が何をしに来た。ここは天空と高山の聖地なるぞ。智慧浅き生き物は去れ」

足場の悪い崖の途中で、危うい状況がらも、真兮は、

「ふ。

今どき、智慧がどうのと言うか」

「何を」

「智慧とは何か。もはや、さような時代ではない。超越論的に見れば、言辞など地を這う虫のごとし。金翅の鳥とは名ばかりか。

未遂不収は今日の常識。科学的な事実だ」

「未遂不収は定見ではない。どのような方向性も示さない。お前の言葉を聞くと、まるで方向があるかのようだ。科学的で、しかも、事実ではあるが、無方向及び全網羅だ。

下衆なことよ、愚か者め」

「合理的な考えだな。論理に支えられている」

嘲るように真兮が言うと、ユームは蒼白になった。
「どうやら耄碌したようだ。人間とて皆、同じではないというわけか」
一行は七羽のクローヴィングの背に乗って北嶺を越えた。

第七章　ロッカセッカの城砦

強い日差し、乾燥した空気、白い岩と、カーペットを敷いたかのような鮮やかな緑の草が生え、灌木が所どころに点在する美しい風景。
ドメネコーニはフロレチェの南、アクイーノ村の近く、代々ランド伯を世襲する貴族の家に生まれた。首都フローラからは五百マイルも離れている。
ロッカセッカ城がその居城である。なお、母テラはスパルタクス帝国のホーシュフェン家の出身で、家柄から言えば、高位であった。
伯父のシバドがモンテ・カジーノ修道院の院長であったため、ドメネコーニは五歳から寄宿して学び、附属大学を優秀な成績で卒業すると、さらにスパルタクスの第一大学で学び、首席で卒業、その後、アカデミアに職を得たのだ。
「いやあ、いいところだな。
やはり、南方はいいね。人間的だ」
真兮は馬車の窓枠に肘を乗せて、のんびりと言った。普蕭は顔をしかめ、
「ロッカセッカの城は間もなくだ」
一行はアカデミア天領の境界を超え、隣国ヴォゼヘルゴの寒村ヘッセに降り立つと、エジンバール川を二千マイル余り下った。川はそこから先はローマン河と合流するので、悠々と蛇行する大河ローマンを揺蕩い、肥沃な谷と、輝く森、美しい白と緑の丘陵のフロレチェ王国内に入って南へ下ったのである。船上で過ごし、旅すること、四千マイルを超えた。上陸してからは馬車と馬を買い、今、アクイーノの村近く通過するのである。
城砦は大きな白大理石の岩の上に建っていた。
そのため、城門近くになると物凄い急斜面だ。門に入るとすぐに建物で、敷地はかなり狭そうだし、平坦なスペースは殆どなさそうであった。大きくはないが、砦の剛直さと、城の華やかさを持つ。
「中に入っていろいろ見てみたいが、家族が赦さないだろうね。

彼らを強制するほどの権限はないからなあ。

トマス・アクィナス派の調査委員会の依頼文も、所詮は、一派閥のものだからね。アカデミアからの印璽でもあれば別だが、一派閥のものでは私的調査と同じだ。

外観から何かを得るしかない。

さて。

辺境に土着する古来の豪族、族長として領土を守ってきた一族。元々は武門系なのだろうね。

ドメネコーニも大柄だった。彼の一途さや精力的なところも、その辺に由来するのかもしれないな。興味深い。と同時に、それへの無意識的な反発が哲学的思料へ彼を導いたのかもしれない。

人の動機に境界線があるわけではないからな。背反する心的原因も複雑に絡み合って混ざり滲み合い、一様ではない様相を以て、人間を自分自身でも実は明確には解明できていない動機を成し、行為へと衝動させる」

普蕭は頷きながら聞いていた。

「なるほどね。

ところで、今、ふと思ったんだが、ここはパルメニデス派（エレア新派）の首領とも言えるパルメニデス二世の出身地エレアに近いな」

「よいことに気がついたね。

それが大きなヒントだ」

龍児は怪訝な顔を。

「それが何か」

「パルメニデスの存在論は彼の神秘体験に基づくとも言われている」

「おゝ。じゃ、祭壇への祈祷中に見たヴィジョンと何か関係が」

「関係はない。ただし、同じ土壌にいた以上、要素としては、紛れて何らかの作用をしていても、おかしくはない、微細な何かが。さて、先を急ぐか」

「ふむ。

では、モンテ・カジーノ修道院へ行くか」

「そうだね。

ともかくも、用心しよう。小生らがここに来ることは、敵方には、お見通しなのだろうから」

修道院は附属図書館が公開されていたので、偽名を使い、閲覧室に入った。
司書席が空いているのを見て、真兮は閲覧記録を凄い速さで照覧した。つぶやく。
「アリストテレスだ。やはりな」
「それがどうした？」
龍児の問いに、呆れ顔で普蕭が替わって応えた。
「ドメネコーニの本質論はアリストテレスが基礎にあるんだ」
「あゝ、そういうことか。アリストテレスと言っただけでよくわかったな」
「そりゃあ、わかるだろう。だって、他の誰の閲覧記録を見る必要があるんだ。『此れ在れば、此れ在り』さ」
「そりゃ、そうだが」
外で見張りをしていた真兮の護衛兵（巡礼者に変装）がそうっと近づく。
「敵の偵察隊のような連中が周辺に現れました。眼つきの鋭い蛮族の傭兵です。ほとんどオークと変わらんような連中です」
真兮は黙って頷く。そして、何も言わないので、傍で聞いていた普蕭が怪訝な表情をすると、
「では、個別の事象へと還ろうか」
清まし顔で言う。龍児が焦った面持ちで。
「何を言っているのかよくわからない。
散り散りに逃げるということか。しかし、どうやって。この程度の変装では、簡単に見破られる」
「そうとも言うが、ともかくもつまりは、自然体で行こう、ということさ」
普蕭も疑義を呈する。
「おい、このまま出て行くのか」
「そうさ」
「哲学はともかく、生命の灯を消す気か。神の命題は生命だ。待ちたまえ、おい、危機管理はどうした」
「それは理窟さ。論理という、根拠も実態も、ともに不明な手法による判断だ。たまには、超越論的に行ってみよう」
「いや。君の御宗旨である現実主義を推挙するね。僕らは右に行くことも、左に行くこともできる」

「そういう君に妙案があるのか」
「ない」
「小生にはある。院長室へ行こう」
サラマンダー院長は太って厳めしい白髪の赭ら顔である。聖の聖なるアカデミアの人たちと聞いて、一応は畏まって承る態度を示す。
高価な木彫家具と厚い絨毯の院長室で、真兮は直訴した。
「まことに嘆かわしくも、アカデミアの派閥争いで、小生らは命を狙われております。この窮地を脱すべく、ご助力を賜りたい」
「余に何をしろと」
「スイ（隹）をお借りしたい」
「スイだと？　それはならん」
神との連絡に使う鳥である。天に放たれると、高く飛ぶが、必ず戻ってくる純白の鳥であった。
「では、スイ自身に伺ってみましょう。スイは神の意志を反映します」
「スイの意志だと？」
さすがに〝そんな馬鹿な〟とは言わなかった。
止まり木に泊まるスイが運ばれると、真兮は意味不明な言語を喋る。スイは甲高く鳴くと、院長を振り向き、なじるように睨んでから、いきなり飛翔し、どこかへ去った。
「いったい、どうしたことだ」
院長は蒼白である。
普蕭も怪訝な顔で密かに真兮に訊く。
「おい、おい、これは、いったい、どういうことなんだ」
真兮は肩をすくめ、
「いにしへの叡智さ。考えてもみたまえ、神と人との間の使いとなるためには、意思疎通が出来なくてはならないだろう。古代にはそのための技術（言語）が実在したのだが、表層的な現実主義に陥った近代ではその技術が失われてしまったのさ。現実は意識が做る。これが良い実例だ。
現実主義的でもあり、超越論的でもある」
龍児も訊く。
「しかし、これでどうなるんだ」

「見ていたまえ」
スイはクローヴィングたちを呼んで来た。一行は再び背に乗り、追尾者を嘲るように宙を舞ったのである。

第八章　同源波羅蜜斗

囲まれた真兮らを急襲しようとした傭兵らは

第九章　彝之〆裂

第二部　現実主義

第章　スパルタクス帝国へ
第章　パルメニデス　白と碧の十文字正教派
第章　サトルト
第章　ベッカムの郷里

第三部　Post　彼方へ

第一章
第二章

忘備記

本質論派（イデア主義）
パルメニデス派（汎神論的イデア論）
パルメニデス二世
スパノーザ・ヴェーメ
デウスセウス
トマス・アクィナス派（超越主義寄り）限定的本質実在論
ドメネコーニ
ガリーオン

白と碧の十文字正教派
ロンノ・パパタナシュー
バルディアーノ
古典イデア論派（個別イデア論）
ポロトス
プラトニー

現実主義
実存主義
サトルト
ベッカム・ウィームス
非真理派（現実主義無空派）
シューニャータ
リビディーノ
外道
釈迦牟尼主義
バン
シュッダーナ
イクシュヴァーン
天易真兮

ポスト真理派
汎神論者
エチカ
金剛乗派（超越論主義）
絶空　龍鳳　ヴァジュラーノ
超人主義
フリードリッヒ　自爾　日智叡（にちえい）　龍咒
流動差延派
ジョン・ダリダ（無窮的反本質論）

ヘーガル（無限止揚論、無限超越論）